

清水 浜臣

国学者・しみず はまおみ Hamaomi Shimizu
1776～1824

【安永5年～文政7年】

来草年
文政2年/1819



国学、短歌、医学。
広く学問を修めた、江戸後期の俊秀。

江戸後期の国学者・歌人・医者。国学を村田春海に入門して学ぶ。20歳ごろから吉田南園らと『文徳実録』や『三代実録』など六国史の会読の会を持ち、史書や古典に専念。文献への執着は並々ならぬものがあり、賀茂真淵の自筆稿本は師である春海にさへ使わせなかった。真淵の偉業とその一門の業績を後世に伝える意味で『泉門遺稿』の刊行は、大きく評価されている。歌人としても江戸歌壇で確固たる地位を築き、泊泊舎に教えを請いに訪れる者は多かった。著書は幅広い分野に及ぶ。代表的なものに、家集『泊泊舎集』、文集『泊泊文集』、随筆『泊泊筆話』など。

浜臣は、草津に入道した時のことを紀行文『上信日記』に著しています。訪れた時、草津は行業のピークを過ぎ、宿客は少なかったと味気ない思いで語る彼は、宿で情報を入れたのか「5月末から7月には一つの宿に700～800人泊まる」と記し、この文章からも文化・文政期の草津の繁栄ぶりがうかがえます。また、せっかくの来草でしたが、本人は入道しなかったようです。

良寛和尚

僧侶・りょうかんおしょう Buddhist Priest, Ryoukan
生年不詳～1831

【生年不詳～天保2年】

来草年
文政10年/1827



子ども、動物を愛し、
芸才に優れた「手まり上人」。

和歌、漢詩、書などの分野で優れた才能を発揮した、江戸時代の僧。生まれは越後国の出雲崎。家は名主兼神職の旧家。名主見習役をしていたが、出家。安永8（1779）年ごろ、国仙和尚に従って備中国の円通寺に移り、修行に励んだ。寛政8（1796）年ごろに帰郷。出雲崎を中心に各地を漂泊した。やがて国上山の五合庵に定住。晩年は、村童を友とする脱俗生活を送る。良寛は説教をせず、著書も奇も残さなかったため、その生涯には謎が多いが、弟子・貞心尼編さんの歌集『進の露』に収められた和歌をはじめ、良寛作の漢詩、書からは、芸術を敬愛した人物像を垣間見ることが出来る。

晩年、村の子どもと膝をついて遊んだことから、「手まり上人」と呼ばれた良寛。彼には草津に八助という知己がいて、草津への行脚は、旧友の顔見たきに足を運んだものと思われれます。当時、八助は病を患っていて、良寛は、彼のために薬を煎むなどして、友人を気遣ったという話も伝えられています。また、八助を偲んだ詩も残されています。

高野 長英

医師・たかの ちようえい Choueï Takano
1804~1850

来草年
天保元年/1830



シーボルト、華山に学んだ思想家。
蛮社の獄で弾圧。

幕末、進歩的な思想を展開した学者。陸奥・水沢の生まれ。幼いころ父と死別し、母方の伯父、医師の高野玄斎の養子になった。17歳になると医学修業のため江戸へ。文政8（1825）年には長崎に赴き、シーボルトの鳴滝塾で西洋医学と関連諸科学を学んだ。同11（1828）年、11月シーボルト事件が起きると身の危険を感じ、江戸に戻り、町医師に。日本で最初の生理学書『西説医原概要』を著す。その後、蘭学の大家・渡辺華山に学び、数々の思想書を発表。同10（1839）年に蛮社の獄が起けると、永年の判決を受けたが、脱獄。各地を転々としながら『兵制全書』などを翻訳した。江戸の隠れ家を追って手配され、嘉永3（1850）年、自害した。

長英と群馬県は深い関係にあり、数多くの門人と交友が交わりましたが、「いつ草津を訪れたか」を示す資料は少なく、白根へ登る途中の「高水沢」の言い伝えのみが、長英と草津のつながりを物語っています。それは「彼が立ち寄った際に沢の水を分析し、毒が含まれていたので「この水飲むべからず」と碑に刻んで、旅人の危害を防いだ」というものです。

安積 艮斎

儒学者・あさか ごんさい Gonsai Asaka
1791~1861

来草年
天保9年/1838



昌平坂学問所教授も務めた、江戸の儒学者。

江戸時代の儒学者。陸奥・郡山の生まれ。神職の家の3男であることから婿に出されたが、文化4（1807）年、志学し、江戸へ出奔。佐藤一斎に学んだ。林述斎の塾にも入門し、翌年、私塾を開いた。天保3（1832）年に『艮斎文略』を出版してから名声が上がり、郷里の二本松藩の藩学教授を経て、嘉永3（1850）年、幕府の学問所付儒者に任ぜられた。ペリー来航の際には国書（漢文）の和訳にも関わった。艮斎の名は、彼の巧みな文章力とともに知られ、著書には上記の他『艮斎閑話』『南柯余編』などがある。

艮斎が草津を訪れたのは、天保9（1838）年5月のこと。白根山に登り、『登白根山記』を記しました。文中には、火薬に使われた硫黄の採掘の様子が描かれており、艮斎は白根山の硫黄を「深黄なること紫紺花のごときは絶品なり」と評しました。白根の硫黄は火薬向きで、後に訪れた佐久間象山も驚賞したそうです。

田川 鳳朗

俳人・たがわ ほうろう Hourou Tagawa

1762～1845

【宝暦12年～弘化2年】

来草年
天保11年/1840

江戸後期の俳諧人気を支えた、
「天保三宗匠」の一人。



江戸時代の俳人。肥後国に生まれ、早くから俳句の道を志し、郷土の武久崎石に学ぶ。その後、江戸に出て、鈴木道彦の門弟になった。当時の俳諧は「床屋俳諧」と称されるほど、史上空前の普及ぶり、次第に頭角を現した鳳朗は、成田蒼嵐、板井梅室とともに「天保の三宗匠」に数えられた。絵画にも秀で、肥後藩主・細川重賢は、彼の多才ぶりを高く評価した一人。編著に『芭蕉葉ふね』『蕉門俳諧師説録』『自然堂千句』などがある。

草津には坂上治右衛門（竹塹）をはじめ、鳳朗の門弟が数多く、古くから交友が盛んでいた。鳳朗来草の詳細は明らかになっていませんが、草津への思いは深く、『萬代の つゆの柱か しら根山』などの好句を連ね江戸の地で詠んでいます。また、白根神社境内の芭蕉句碑は、彼の門下生が建てたもの。碑の裏には、敬愛した師の撰文が刻まれています。

佐久間 象山

思想家・さくま しょうざん Syouzan Sakuma

1811～1864

【文化8年～元治元年】

来草年
嘉永元年/1848

公武合体、開国に奔走。幕末が生んだ俊才。



いち早く開国の必要性を唱えた幕末の思想家。科学者でもある。信濃国・松代藩士の子として生まれ、儒学や和算を学ぶ。天保4（1833）年、江戸の佐藤一斎に入門。いったん帰郷するが、同10（1839）年、再び江戸に出て神田に私塾を開く。藩主の真田幸貫が老中を務めた折、顧問に推挙され、『海防八策』を提出するほか、オランダ語を学ぶなど洋学の研究・実践に努めた。安政4（1857）年、同門の吉田松陰の密航計画に手を貸したことが発覚し、国元で蟄居の身に。その後、幕命を受けて上洛。公武合体、開国を説いて皇族、公家の間を奔走したが、元治元（1864）年、京都において、刺客の手にかかり暗殺された。

草津へ訪れたのは物見遊山ではなく、調査のため。科学者・佐久間象山らしい来草目的です。藩命を受け、草津周辺を探検した象山は、『全国有数』と言われた白根山の硫黄を視察、黒色火薬の原料として高く評価しました。また、当時の草津山中は行き来がままならず、紀行文『吾野日記』には「路の幅狭に人馬を過すべし」所を徘徊した象山の苦心ぶりが記されています。

藤田 東湖

水戸学者・ふじた とうこ Touko Fujita
1806~1855

〔文化3年~元治2年〕

来草年
嘉永6年/1853



徳川斉昭とともに尊王を唱えた、
水戸学界の権威。

強烈な尊王攘夷思想により、諸藩に大きな影響を与えた後期水戸学の、大成者の一人。父は後期水戸学の重鎮・藤田鳴谷。文政12（1829）年、徳川斉昭を水戸藩主継嗣に擁立する運動を推進。斉昭が藩主に就任した後は藩の出世頭となり、天保11（1840）年、側用人を拝命。戸田忠太夫とともに水戸藩・天保改革派の中心人物となった。しかし、弘化元（1844）年に斉昭が隠居謹慎に処せられると免職。禄も剥奪され、幽閉、居宅謹慎の身に。処分解除は嘉永5（1852）年まで待たれた。斉昭が幕政に復帰すると、側用人に復職。翌年、安政大地震により江戸藩邸で圧死した。著書に『弘道館記述義』『常陸帯』など。

藤田東湖が草津を訪れたのは、友人が鳴谷みに来ていることを知り、彼の後を追ってきたからと伝えられています。東湖来草の詳細は長く不明でしたが、草津や俳名を詠んだ手記が発見され、明らかになりました。文面には詩のほか、押韻のメモ書きなども記されており、草津の風景を前に、顔をひねり推敲する大学者・東湖の姿が目に浮かびます。

堀 秀成

国語学者・ほり ひでなり Hidenari Hori
1819~1887

〔文政2年~明治20年〕

来草年
慶応元年/1865



武士から転身。言葉に魅せられ、
“音”に関する分野を大成。

国語学、特に漢字の“音”に関する分野を広く修めた学者。下総国・古河に生まれ、武士としての教育を受け、山鹿流の兵法に学ぶ。しかし、天保12（1841）年、国学を志し専念。諸家に学んだ後、富樫寛孫に師事した。各地で講義をして歩き、明治3（1870）年、少博士に任ぜられた。同5（1872）年に御前で通講してからは、皇太神宮瀬宜、学習院語学教示、伊勢の神宮教院の教授などを歴任した。著書に『助辞本義考』『音韻大全』『音義本末考』『言霊妙用論』『音韻略説』『語法本義論』などがある。

秀成は、慶応元年に『草津繁昌記』という本を著しています。内容は、『湯宿』『問所』『湯堂』『茶屋』『商人』『おあまり』『東神堂』『つばまはり男』『貸本屋』『通具屋』『髪結』『夜店』『立振舞』『広小路』の14章に分かれていて、当時の賑わいの様子が細細に記されています。幕末の草津を盛り上げた貴重な資料です。

エルウィン・ホン・ベルツ

医師・Erwin Von Baelz
1849～1913

【嘉永2年～大正2年】

来草年
明治11年/1878



高温質、時間湯の効能を世界に発表。
「明治国家」と「草津」の発展に貢献。

明治政府の“お願ひ外国人”の一人として来日したドイツ人医師。ドイツの田舎町ビーティヒハイムに生まれ、チュービンゲン大学とライプチヒ大学で医学を学んだ。臨床的に体温計を初めて使ったウンデルリッヒの内科学教室に所属し、明治9（1876）年、ベルリンで駐独公使・青木周蔵と生理学兼内科学の“お願ひ教師”の契約を結ぶ。同年6月、東京医学校（東京大学医学部）に着任。日本の医学教育、医療の西洋化に大きな役割を果たした。再三の契約更新を行い、29年間、日本に滞在したが、日本人教授が彼を疎外するようになったので帰国を決意。ドイツに戻ってからはシュツットガルトで暮らし、人類学界で活躍した。

ベルツ博士は、近代医学の父といわれています。草津温泉の特異な泉質、時間湯、美しい自然に魅せられ、度々来草し、優れた湯治効果を研究。効能ゆたかなKusatsuの名を国内外に広めました。「土地を購入して理想的な温泉郷を形成しよう」と思い描いていたことから、その熱心ぶりがうかがえます。西の河原公園には、ベルツの功績を讃えた碑が建てられています。

ベルツ・花

ベルツ夫人・Hana Baelz
1864～1937

【明治元年～昭和12年】

来草年
昭和10年/1935



夫の偉業を支え、
日本とドイツ、交流の架け橋に。

ベルツ博士の妻。旧姓は荒井はつ。ベルツとの結婚年は定かでないが、当時コレラが流行り、花が「防疫に奔走する夫を助け、細やかな心を配って励ましていた」という記録から、明治20年前後かと思われる。新婚当初、ベルツ家には西洋人が集まり、活発な日本研究が交わされたが、彼らは花を「明朗闊達」「しとやかな立ち振る舞い」の日本女性と称した。また、日本文化、美術に造詣が深く、ベルツの多彩なコレクションは、花の協力に拠る。ベルツの帰国に伴いドイツに渡ったが、ベルツ没後は愛息・徳之助を残し単身帰国。昭和12（1937）年、亡き夫ゆかりの東京帝国大学付属病院で死去。シュツットガルトのベルツ家の墓に永眠。

花夫人が初めて草津に来たのは72歳の時。亡き夫の記念碑の除幕式に参加するためでした。不思議なことに、ベルツ博士は何度も草津を訪れたにもかかわらず、花夫人を連れてきたことはなかったのです。彼女にとっては、それが最初で最後の草津になりました。

ジュリウス・スクリバ

[高永元年～明治38年]

医師（ドイツ人外科医）・Julius Karl Scriba
1848～1905

来草年

明治24年/1891



ベルツとともに、 日本医学界に尽くした“お雇い医師”

ドイツ人医師。ハイデルベルク大学卒業後、陸軍軍医に。明治14（1881）年、“お雇い”外科学教師として明治政府に招かれ、日本の近代外科、麻酔学の基礎づくりに貢献。眼科学、裁判医学も請じた。また、日本薬局法の制定にもあたり、大津事件、瀬尾大地震の際には、現地に飛んで医療活動に従事した。明治34（1901）年に約20年間在任した東京大学を退官すると、聖路加病院の外科主任となった。彼の名声は、日本だけでなく、東南アジア各国にも届いたほど。植物学に造詣が深く、日本の美術品にも関心を寄せた。

スクリバ博士は、ベルツ博士の東京大学時代での同僚で、草津を訪れたのも、ベルツの案内によるものでした。二人は、東京大学最後の“お雇い教師”であったことから、親交が深かったようです。余談ですが、スクリバ博士は日本で最初にシェパード犬を飼った人物でもあります。

エドムンド・ナウマン

[戊辰元年～昭和2年]

地質学者・Edmund Nauman
1854～1927

来草年

明治15年/1882



フォッサマグナ、ナウマン像。 マルチに活躍した地質学者。

ドイツ人地質学者。マイセンに生まれ、ミュンヘン大学で地質学を学んだ。バイエルン鉱山局に就職した後、明治8（1875）年に来日し、東京大学の初代の地質学教授となった。その後、政府に提言して内務省地理局に地質課を新設させ、勤務。日本全土の地質学的調査に専念。最も著名な成果として挙げられるのは、「本州中部を横断するフォッサ・マグナの発見」と、知見を土台に、「日本列島の構造の生成に関する地質学的仮説」を立てたこと。地質調査の傍ら、化石の発掘、調査も行い、小豆島などから出土した旧象化石には、彼の功績を称え「ナウマン象」と名付けられた。明治18（1885）年、ドイツに帰国。

「ナウマン象」の名で知られるナウマン教授ですが、本業は地質学者。来草のお目当ても、温泉より、やはり白根火山の地質のようでした。現地で行った調査は、「日本地質の探究」という論文の中で報告され、その年、実際に起こった蒸気噴火の順列について、見解が示されています。また、明治15（1882）年、草津白根山火口付近の正確な測量図を残しました。

A. E. ノルデンショルド

[天保3年～明治34年]

探検家・Adolf Erik Nordenskiöld
1832～1901来草年
明治12年/1879スウェーデンの探検家。
“ヴェガ号”に乗り込み、未踏の地へ。

フィンランド出身の探検家。鉱物学者、古地図研究家でもある。祖国のロシア的体制を批判したことから公職追放に遭い、隣国スウェーデンへ。安政5（1858）年から死去までストックホルム国立自然史博物館教授を務めた。彼の名を世界的に知らしめたのは、明治11～13（1878～80）年、政府の探検船「ヴェガ号」に乗り込み、北極海の氷洋横断を敢行し成功させたこと。探検の様子は「ヴェガ号航海記」に収録。帰国途中の明治12（1879）年、日本に2ヵ月ほど滞在し、書籍、資料を収集。生涯をかけて幾度の探検を試みる傍ら、和書1,082種、西洋古地図約2万4,000点を集め、それぞれストックホルム王立図書館、ヘルシンキ大学図書館に所蔵されている。

ノルデンショルド教授が草津を訪れた時の様子は、名著「ヴェガ号航海記」中の「日本印象記」の一部に「草津温泉印象記」として、「至難心地がよかつた」と親しげに語られています。また、温泉地を見出すとすぐに「この近辺の岩はみな溶岩又は火山性凝灰岩で…」と的確な分析を下しているのは、著名な探検家ならではの。旅行中に「日本の馬は鞍が高すぎたので移動には難儀も使った」という苦勞話も伝えられています。

松浦 武四郎

[文政元年～明治21年]

探検家・まつうら たけしろう Takeshiro Matsura
1818～1888来草年
明治19年/1886蝦夷地を踏破。
アイヌの現状を訴えた探検家。

江戸末期の蝦夷地（アイヌ地方）の探検家。伊勢国須川村（現・三重県一志郡三雲町）の郷士の四男に生まれ、16歳の時出奔。全国を遊歴して文人、勤王志士と交わった。日本初の詳細な蝦夷地誌である「蝦夷日記」は、弘化2（1845）～安政5（1858）年まで6回に渡る踏査によりまとめられた。全155巻に上り、幕府にも呈上。日誌の中では、アイヌ民族の苛酷な現状が「明日のご開拓より今日のアイヌの命を」と切々に訴えている。明治2（1869）年、明治政府から開拓判官に任じられ、北海道および国郡名の名付け親としても知られている。また、「蝦夷日記」の縮抄本ともいふべき「蝦夷紀行」22巻も刊行した。

武四郎が来草したのは、判官職を辞した後のこと。「松浦武四郎紀行集（上）」には、明治初期の草津が「頗る繁華の地（日本無双と云ふも誣言ならず）」と記されています。武四郎は、秋の風景美に惹かれ、その時の心境を「谷こしに昨（けふ）見置し紅葉に今日の朝（あ）出（で）いそがれにけり」という歌に残しています。また、蝦夷を探検した後が草津を「土地頗る風烈しく夜寒し」と評しているのは、興味深いエピソード。谷沢川上流にある高野長英「毒水の碑」を松浦武四郎が明検し、そのスケッチも残されています。

コンウォール・リー

社会奉仕家・Cornwall Leigh
1857～1941

【安政4年～昭和16年】

来草年

大正4年/1915

布教と、らい病治療に身を捧げた、英国女史。



社会奉仕家、運動家。英国カンタベリー生まれ。名家に育ち、熱心にキリスト教を信仰。母親を失い、相続が決まった巨額の財産を「自分の余生」と「人類のため」に使うことを誓う。初来日は明治41（1908）年。大正4（1915）年に、草津を訪れ、湯之沢を視察。翌年、同地に、らい病患者のための聖バルナバ教会を建設。自身の信仰の普及・伝導を行う。さらに聖バルナバ病院を開設し、治療・介護に努めた。衣食住は節制し、社会奉仕活動に従事。女史の功績は高く評価され、昭和3（1928）年に藍綬褒章、昭和14（1939）年には勲六等瑞宝章を受賞。喜寿の後、一旦帰国。兵庫県明石市で静養の末、永眠。

前述のように、リー女史は、草津の地で多大な足跡を残しました。精力的な女史は、来草早々、雪解け道を歩いて、患者の家を訪問。汚れ物を洗ってあげたり、花を飾ったり、愛情を持って活動を進めたといわれています。夏は湯畑付近で週に1度説教を行い、普及に努めました。遺言により、遺骨は草津・聖バルナバ病院に安眠されています。

大槻 文彦

国語学者・おおつき ふみひこ Fumihiko Otsuki
1847～1928

【弘化4年～昭和3年】

来草年

明治12年/1879

『言海』を編集。
大正、昭和の国語辞典の基礎に。



国語学者。仙台藩の儒者・大槻磐溪を父に持ち、幼い頃から漢学を享受。後に大学南校、三文学舎に学んだ。明治5（1872）年、文部省に出仕し、英和対訳辞書を編集。国語調査委員会主査委員、臨時仮名遣調査委員会などを歴任し、明治44（1911）年、帝国学士員会員となった。彼の最大の業績は、国語辞典『言海』の編集。語彙を多く集め、50音順に配列し直し、文法的解説とともに用例を挙げたことは画期的であり、のちの国語辞典の依拠するところとなった（没後刊行の『大言海』は、これを増補したもの）。代表的著書に、江戸以来の国学の流れと西洋文典の折衷を研究した『日本文典』、及びその解説書『日本文典別記』など。

文彦は来草の様子を、著書『腹軒旅日記』中に「土毛温泉遊覧」と題し収録。博物学を専攻していた田中芳男を旅の友にして、日向見から入山村和光原を抜けて草津に入りました。「毎りに暮れ時を越え、伊香保温泉へ向かう」と文中には記されています。

徳富 蘇峰

【文久3年～昭和32年】

歴史家・思想家・とくとみ そほう Sohō Tokutomi
1863～1957来草年
大正14年/1925明治の思想家。
清新な論旨が若者の心をつかむ。

「明治青年の指導者」と呼ばれたジャーナリスト、歴史家。熊本県生まれ。早くからキリスト教に入信し、明治15（1882）年、私塾大江義塾を開塾。自由主義を掲げた。明治19（1886）年に発表した『将来之日本』で一躍文名を高める。翌年には、民友社を設立。創刊した雑誌『国民之友』は、清新な論旨を展開し、青年層に圧倒的な支持を得た。また『国民新聞』を刊行し当時の言論をリードする存在に。しかし、日清戦争前後から「挙国一致」と「軍備拡充」を唱え、藩閥政府反対の立場を方向転換。山県・桂内閣のブレーンとして活躍した。その後、さらに思想を発展させ、生涯、言論界の雄として君臨した。弟は作家の徳富蘇花。

蘇峰は、著作『毛信遺記』の中に、草津・軽井沢を訪れた時の様子を、9章に分けて著しています。この内、草津のことに触れているのは3～7章。精密で細かく描写は、ジャーナリストならではの。本を讀くと、蘇峰が訪れた夏の草津の風景が、目に浮かぶように記されています。

田山 花袋

【明治4年～昭和5年】

小説家・たやま かたい Katai Tayama
1871～1930来草年
明治26年/1893館林生まれ。
『蒲団』『田舎教師』は自然主義文学の金字塔。

本県出身の明治・大正時代を代表する小説家。父の世界後、書店の小僧などを経て、桂岡派歌人・松浦辰男に入門。『文学界』や『国民之友』に詩や小説を寄稿し、国木田独步や柳田国男らの合同詩集『抒情詩』にも参加する。尾崎紅葉、江見水蔭を訪ね、前期自然主義の気流の中で、機関誌『我楽多文庫』でも名高い文学結社「硯友社」に入門。悲恋物語を綴り、『重右衛門の最後』を発表して注目を集めた。『露骨なる描写』以降、自然主義の推進者となり『蒲団』で文壇の地位を確立する一方、『文章世界』の主筆として論陣を張った。明治42（1909）年に刊行された『田舎教師』は、不朽の名作といわれている。

明治の文学・花袋は、草津へ3度足を運んでいます。初めての来草は、明治26（1893）年。処女作『瓜棚』について『落花生』を書き、これからという時期でした。明治30（1897）年、博文館より出版された雑誌『太陽』8月号に「草津遊を論ずるの記」を掲載。流行作家となっていた3度目の来草時のことは、洋画家・中澤弘光との共著『温泉風流』に収められています。

志賀 直哉

[明治16年～昭和48年]

小説家・しが なおや Naoya Siga
1883～1971

来草年

明治37年/1904



不朽の名作数多く、
“小説の神様”と称された白樺派作家。

強烈な自我意識と深遠な感性に支えられた精緻なリアリズム文学を確立した白樺派の代表的作家。宮城県出身。気性の激しい祖母に育てられたことが、直哉の人間形成と父との不和に大きく影響する。東京帝国大学を退学し、武者小路実篤らと『白樺』を創刊。父との対立を『大津順吉』『和解』に描く一方、『城の崎にて』『小僧の神様』『焚火』などの名作短編を生む。夏目漱石の依頼で朝日新聞に連載予定の『時任謙作』が書けず、それは後に『暗夜行路』という近代日本屈指の長編に結実した。“小説の神様”と称され、芥川龍之介の賞仰や、太宰治の反発など文壇に与えた影響が非常に強く、多くの文学者の指標ともなった。

直哉は、草津へ3回訪れています。最初は、学生時代の貧乏旅行。二度目は文名も売れ出した大正11年でしたが、直哉の名を知らなかった番頭が「お職業はやはり農ですか」と尋ねられ、つい「そうです」と答えてしまったと『草津温泉』に書かれています。3度目は戦前。訪れる都度、交流を深めたといわれています。また、名作『暗夜行路』の後半は草津の宿で書かれたことが分かっています。

富田 常雄

[明治37年～昭和42]

小説家・とみた つねお Tsuneo Tomita
1904～1967

来草年

大正8年/1919年



活劇物を得意とし、
多くの読者を惹きつけた大衆作家。

『姿三四郎』など柔道物、開化物に独特な作風を示した小説家。筆名は伊皿恒夫。東京生まれ。父は講道館四天王のひとりに数えられた常次郎で、常雄本人も柔道五段の腕前。昭和3（1928）年に今日出海、舟橋誠一、村山知義らの劇団「心座」の文芸部に参加。昭和17（1942）年に発表した『姿三四郎』は、翌年、黒澤明の監督により映画化される。昭和24（1949）年に『黒』『刺青』の2作品で戦後初めての第21回直木賞を受賞、たちまち流行作家となる。「東京新聞」に連載された『弁慶』は、大評判になり、多くの読者を湧かせた。作品は、他に『熊谷次郎』『柔』など。

黒澤明監督作品としても有名な『姿三四郎』の著者・富田常雄は、昭和38（1963）年に発表した『掛けむり』の小説の中で主人公が、草津へ湯治に来たことを次のように描いています。「宿の二階の手すりから湯槽のいい掛けむりを眺めた。『おっそろしく湯が赤ってやがるな。江戸へ持ってたら湯屋が定めし勘かるだろう。』と」